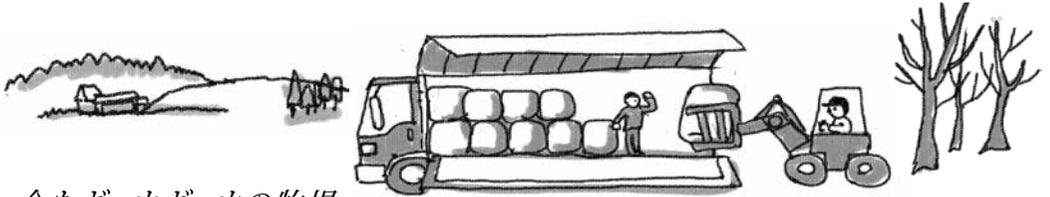


昨年2月16日にごみかんが主催した『3.11から2年～福島と多摩をつないで』。「希望の牧場(福島県浪江町)の吉沢正巳さんに「警戒区域で被爆した400頭の牛を飼いつづける理由」を話していただき、大きな反響を呼びました。(ごみっと95号で報告) 1年が経った牧場の様子をお伝えします。



### 今もギョウギョウの牧場

希望の牧場には今も約350頭の牛がいます。雄牛に去勢を施すことで子牛が生まれることはほぼなくなり、病死したり事故死する牛も月に4、5頭いる一方で、飼育が困難になった20km圏内(旧警戒区域)の畜産農家の牛を助けたり、迷い牛を囲い込んだりしてきたので、結局あまり減っていません。

吉沢さんは「この規模とスタッフ数だと面倒をみられる牛は150頭くらいだが、現実にはその倍以上がいる。今後少しずつ頭数は減っていくだろう

が、しばらくは大変。でも生かし続けるしかない。『原発事故後』という異常な時代を生きる我々のシンボルとなる牛だからね」と言い、1年前の決意はいささかも揺いていません。

昨年の講演会で「僕はこの惨状を日本中どこへでも話しに行くよ」とおっしゃっていた通り、各地での講演や渋谷の街頭での街宣を精力的にこなし、支援者の数も増えつつあります。

### 餌確保に特化したウィズキャトルの立ち上げ

しかし現実には厳しく、牧場スタッフは常に餌の確保に追われています。なんととっても牛1頭が1日に食べる餌は50kg! 350頭もいたら、通常の餌の価格だと8万円/日ほどかかるそう。とても寄せられる支援金だけで賄える金額ではありません。

そこで昨年秋に「やまゆりファーム」のメンバーが、餌の確保を活動の中心にした新しい団体を立ち上げました。名づけて「with cattle = ウィズキャトル」。牛と共に…という意味合いです。

ウィズキャトル(以下WC)の何がすごいのかと聞いて、希望の牧場で飼われている牛だけでなく、20km圏内で同じように殺処分抗って牛を飼いつづけている十数件の農家さん(牛の数約350頭)の支援(餌、支援物資、ボランティア、獣医派遣など)をも視野に入れる決意をしたことです。

WCの実質メンバーはたったふたり。余裕があるわけではありませんが、餌も支援も足りない畜主さんが今にも折れそうになっていることを知っているからです。

### ウィズキャトルの仕事と新たな問題

WCの主な仕事は、東北・北関東の汚染された藁ロール(\*)を探し、持ち主の農家を一軒一軒訪ねて交渉し、もらったロールを希望の牧場へ運ぶ。さらに餌不足で困っている畜主さんがいれば分けてあげることです。

大豆カスなど食品工場から出る食品残渣や、マーケットなどで廃棄される野菜や果物を分けてもらうための交渉も続けています。

\*農家は国が定めた100bq/kより厳しい50bq/kを越えた干草を牛に与えないようにしたため、売るための牛に食べさせられなくなった藁ロールが多くある。

WCの活動が始まって4ヶ月経った今、大きな問題が立ちはだかっています。ひとつは運搬費用の問題です。ロールをひとつ運ぶ費用はだいたい2300円。10tトラック1台で5万円もの運賃がかかります。そもそも20km圏内に入ってくれる運送業者がなかなか見つからないとのこと。

またWCが活動することで牧場は人手不足になりがちです。希望の牧場には着替えや休憩に使える「ボランティアセンター」ができ、訪れるボランティアさんも増えています。しかし、重機を動かせる人、水道工事や大工仕事ができる人、といった「欲しい人手」はまだまだ足りない状況です。

多くの問題を抱えながらも「やれることをやるだけ」「牛を最後まで生かす気持は変わらない」と、吉沢さん、やまゆりファームのみなさんらの気持はぶれることはありません。ごみかん会員さんもぜひWCへ、支援の手を差し伸べてくださいますようお願いいたします。 \*欄外にメールアドレスと電話番号

ごみかん理事 井上真紀子